

JANS37 交流集会K16
(12/16/2017 15:00-16:20, 展示棟 会議室4)

「日本の現場発看護学」の構築を目指した 事例研究方法の開発 第2報:

質的研究方法との関連と科学性の検討

山本則子・齋藤凡・吉田滋子・山花令子・村山陵子・
辻村真由子・池田真理・柄澤清美・榊原哲也・野口麻衣子

この発表は、JSPS挑戦的萌芽研究「日本の現場発看護学の構築を目指した事例研究方法の開発」(研究代表者山本則子)及びJSPS基盤研究(B)「医療現象学の新たな構築」(研究代表者榊原哲也;分担研究者山本則子)の成果の一部である。

日本看護科学学会 COI 開示

- 筆頭者氏名 山本則子
- 所属名 東京大学大学院

筆頭演者は日本看護科学学会へのCOI自己申告を完了しています。演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はありません。

本日の予定

15時00分～15時15分 (15分)	「ケアの意味を見つめる事例研究」のステップ・ 他の質的研究方法との関連（山本則子）
15時15分～15時30分 (15分)	看護実践者として事例研究にとりくんでみて (佐藤美雪)
15時30分～15時40分 (10分)	看護研究者として事例研究にとりくんでみて (野口麻衣子)
15時40分～15時50分 (10分)	現象学的視点からどう見えるか（榊原哲也）
15時50分～16時00分 (10分)	事例研究の科学性・学術性についての検討 (齋藤凡)
16時00分～16時20分 (20分)	自由討議

「ケアの意味を見つめる事例研究」のステップ

実践を説明する **言葉づくり** を意識した 事例研究

- 「記述」に終始しがちだったこれまでの事例研究
 - * 何を読み取ればよいのか・・・何が違いを生んだのか、把握しにくい
 - * **可視化** しにくい



- 「言語化」「概念化」の活用：行われた看護の内容・意味・エッセンスを **言葉（概念）** で表す。
 - 現象から概念へ：一般化可能性の拡大
 - 訪問看護実践の機能や効果を可視化** できる
- 近年の質的研究の発展を最大活用できる

事例研究を進めていくためのステップとしかけ 意識化/言語化・概念化・文章化

意識化/

言語化

しかけ

「ワークシート」

「対話」

「質問」

概念化

しかけ

「大・小見出し」

「キャッチコピー」

「マーカー」

「付箋」

「表」

文章化

しかけ

「前例をよく勉強する」

「前例を真似する」

- ・ 行為の「意味」を意識化・言語化
- ・ なぜそれが可能になったのか ・「すごい！」はどこか

共同作業による看護の可視化

ワークシート

事例研究ワークシート ver.7.0 (06/01/2017)

事例 ()さん ()歳 (男性・女性)

どうしてこの事例を紹介しようと思ったか(タイトルへの第一歩) :

事例の概要 :

事例を取り上げた理由

事例の概要

事例の経過と看護実践

	前期	転機1	中期	転機2	後期
1. 時期ごとに思いつくままに以下についてまとめる ・患者・利用者、家族の言葉と様子 ・看護師が考えたこと ・実践内容 ・患者・利用者の反応・変化		何かきっかけがあったか?		何かきっかけがあったか?	
		どのような変化があったか?		どのような変化があったか?	
		患者・利用者の反応・変化?		看護実践は	
				患者・利用者の反応・変化?	

おおまかな時期ごとに以下の点を書き出す

- ・ 利用者・家族の状況
- ・ 看護師が考えたこと
- ・ 実践内容 (思いつくまま書き出す)
- ・ 利用者家族の反応・変化

「事例研究ワークシート」のファイルは、
東京大学 高齢者在宅長期ケア看護学分野ホームページより
ダウンロードできます。

http://www.adng.m.u-tokyo.ac.jp/j_201512.html

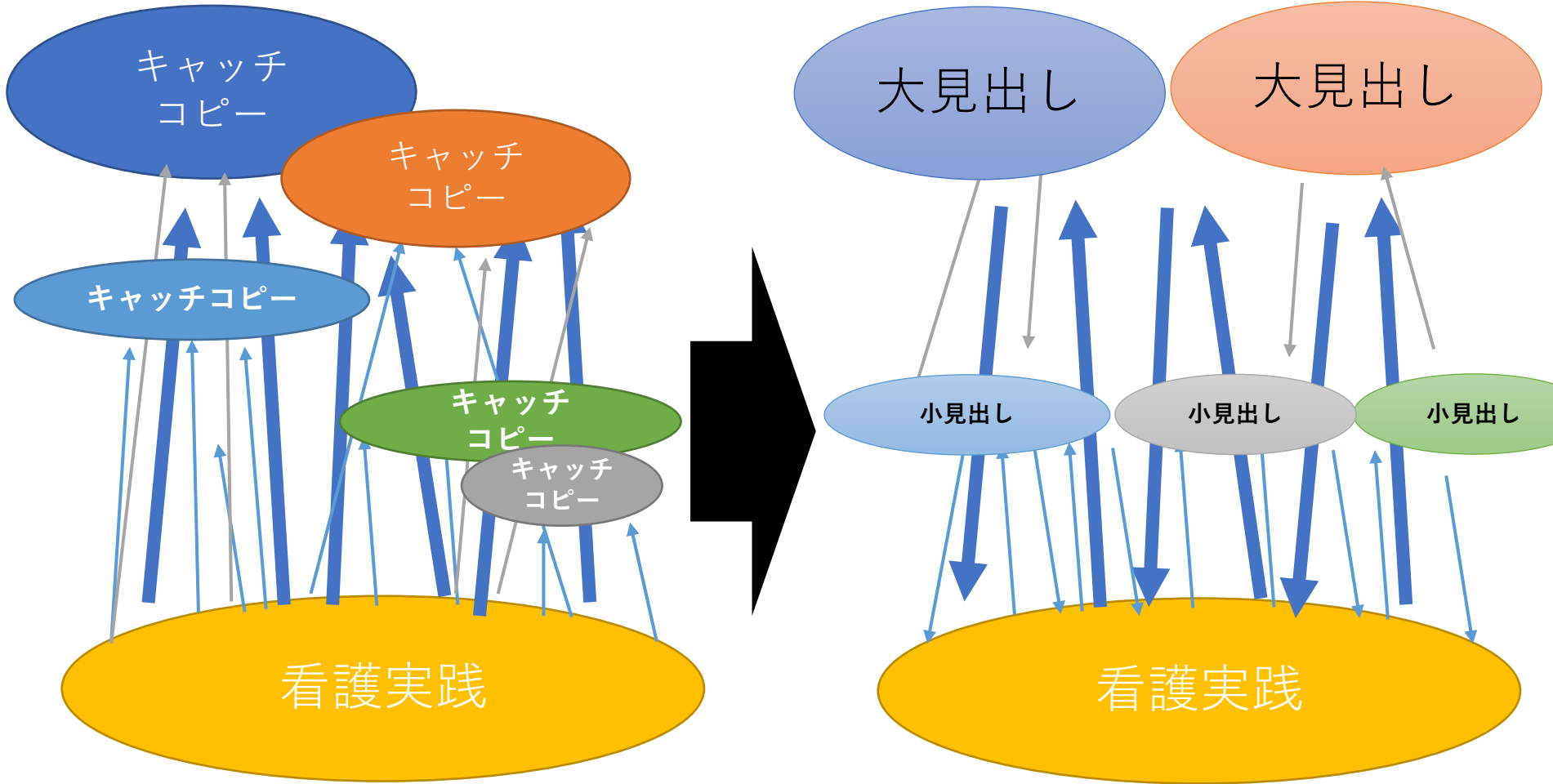
語り合う

- ワークシートを見ながら、事例についてグループで話す・説明する。
- 初めての人にもわかるように詳細に、熱心に話す。
- 関心を持って聞き出す。
 - 質問例①「どうしてこの事例を研究したいと思ったのか」
 - 質問例②「この事例では、どのような良いこと（望ましくないこと）が患者・家族に起こったのか」
 - 質問例③「そのようなことを起こした看護の実践は、どのようなものだったか」
 - その他の質問「どうしてそうしたのか」「実践の意図は何だったか」「何を行ったか」
- 「看護師」を主語にして話す。
- 自分の経験に言葉を与える；対話のなかで、意識化・言語化を促進

キャッチコピーを作る（概念化）

- 「語り合い」の中で、ケア実践の「意味づけ（どのような意図で何をしたか）」を検討してみる。
- 実践の意味の意識化、概念作り
- 実践の意味づけのまとめりごとに実践を整理し、**実践を端的に示す**「キャッチコピー」をつける。

キャッチコピーを洗練したり却下・追加したりして大見出し・小見出しに「脱皮」させる



出てきたキャッチは抽象度がさまざまに重複も

大見出し・小見出しの2段階に整理

表作りをしながら、更に語りあう

- 「表」のシートに、「小見出し」「大見出し」を張り付ける
- それらに属する具体的実践を、マーカー部分を中心に付箋に抜き出して並べていく
- じっと眺めながら話し合う
 - 良い結末となったのはどうしてか
 - 良い結末となるように、看護師はどのようなことをしたのか
- 質問し合う
 - 「どうしてそうしたのか」
 - 「実践の意図は何だったか」
 - 「何を行ったか」
 - 「別の時期にもやっていたか」
 - 「小見出し同士にはどんなつながりがあるか」

修正後の表

看護実践の категория		前期	中期	後期
大見出し	小見出し	具体的実践行為をリスト		
大見出し	小見出し		具体的実践行為をリスト	
	小見出し	具体的実践行為をリスト	具体的実践行為をリスト	
大見出し	小見出し		具体的実践行為をリスト	具体的実践行為をリスト
	小見出し		具体的実践行為をリスト	具体的実践行為をリスト

「表」のファイルは、
 東京大学 高齢者在宅長期ケア看護学分野
 ホームページよりダウンロードできます。
http://www.adng.m.u-tokyo.ac.jp/j_201512.html

本人・家族の希望に沿った終末期の支援を可能にした看護実践

—想定外も想定しつつ、ただ家族を繋ぐ—

2017/11/30 第27号 看護実践研究 44頁

関東 京子¹、山花 令子²、山本 則子²

¹ OX 防衛医科大学 2 東京大学大学院 医学系研究科

背景	発表要旨
<ul style="list-style-type: none"> ● 終末期をどう過ごすかは、本人・家族にとって重要なことである (山本2014) ● 終末期の介護においては家族に後悔が残ることが報告されている (山本2013) ● 本人・家族の希望を引き出し家族間の調整を迅速に行う看護実践の知の蓄積が切望されている (山本2014) 	<p>終末期に患者・家族の希望が変化中、「患者・家族の理解」を進めながら「家族に後悔を残さない支援」を通して「療養場所に関わらず家族を巻き込み患者とつなぐ支援」や「タイミングを逃さない支援」で退院へとつなげた。「退院後も家族が安心できるように」支援を続けることが本人・家族の本当の希望を実現する支援として有効であった。</p>

目的
終末期の患者・家族が自分たちの希望の変化に沿って退院し在宅暮らしまで実現した事例を振り返り、終末期の支援の在り方を検討すること

対象と方法	
<p>事例の概要</p> <p>70代女性 (A氏)、家族は夫と30代姉、誤嚥性肺炎を繰り返し、施設からの入退院を繰り返していた。家族は当初「本人を家に連れて帰るのは無理」「仕事は休めない」と言っていたが、終末期が近づくこと「最後は家で一緒に過ごしたい」と希望を訴えるようになった。弟の決断の2日後に退院し、在宅で2週間過ごして承服した。</p>	<p>分析方法</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 支援提供者が看護記録や経過を振り返ってワークシートに書き起こす。時期ごとに、患者・家族の言葉や看護師が考えたこと、実践内容、その意図をまとめて記載する。 2. 1. を元に、この経過を可能にした実践内容やその意図について話し合う。支援提供者の同僚看護師2名、大学所属の看護研究者3名 3. 話し合いでは、まず実践の大きなカテゴリ一名を検討し、次いでそれと実践とをつなぐ小カテゴリ一名を検討した

結果	
在宅での退院	<p>在宅での退院を実現したことは、家族の希望に沿った実践であった。退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p> <p>退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p>
在宅での退院	<p>在宅での退院を実現したことは、家族の希望に沿った実践であった。退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p> <p>退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p>
在宅での退院	<p>在宅での退院を実現したことは、家族の希望に沿った実践であった。退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p> <p>退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p>
在宅での退院	<p>在宅での退院を実現したことは、家族の希望に沿った実践であった。退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p> <p>退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p>
在宅での退院	<p>在宅での退院を実現したことは、家族の希望に沿った実践であった。退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p> <p>退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p>
在宅での退院	<p>在宅での退院を実現したことは、家族の希望に沿った実践であった。退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p> <p>退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p>
在宅での退院	<p>在宅での退院を実現したことは、家族の希望に沿った実践であった。退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p> <p>退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p>
在宅での退院	<p>在宅での退院を実現したことは、家族の希望に沿った実践であった。退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p> <p>退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p>
在宅での退院	<p>在宅での退院を実現したことは、家族の希望に沿った実践であった。退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p> <p>退院後も家族が安心して在宅で過ごすことができたことは、家族にとって大きな意義があった。</p>

考察
<ul style="list-style-type: none"> ● 入院後早期から、会話の糸口を採すなどして積極的に話しかけ、言葉や行動を観察し、意図を確認しながら関わることで患者・家族の深い理解につながったと考えられる。 ● 深い患者・家族の理解を踏まえ、患者・家族が後悔を残さないよう、支らいてつながれるように配慮した。療養場所が未定でもまずは家族をケアに巻き込むことで、どのような終末期でも後悔を残さないことにつながったと思われる。 ● 療養先の变化の可能性を念頭に置きつつ、患者・家族の気持ちの変化に注意を払ったことは、患者・家族を無らせることなくタイミングを逃さない支援につながったと考える。 ● 家族が退院の意向を訴出した後は、在宅介護に向けて速やかに行動し早期退院につなげ、在宅ケア関係者と確やかに連絡をとることで、患者・家族の在宅療養に対する安心・自信を保つことにつながったと考える。

訪問看護師が実践する家族への意思決定支援： 胃瘻造設の決定を支援した訪問看護の事例

安塚則子 他 (2015) 家族看護学研究

1. 介護負担を軽減し心身に余裕を持たせる

- a. 負担の大きい介護を代行する

2. 情報過多による混乱を助ける

- a. 最低限の情報の補正
- b. よく聞いて情報整理を手伝う
- c. 看護師の意見を言わない

3. 意思決定の重責を緩和する

- a. いかなる意思決定でも支えることを伝える
- b. 時間がかかっても良いことを伝える
- c. 本人の意向が探れないか試みる

4. 後悔しないよう利用者の状態の改善に努める

- a. 患者が笑顔で食べられるよう摂食の援助：「うちは胃ろうにして良かった」と思ってもらう

・「私たちの実践は、なぜうまくいったのか」「この実践から何を学び取ればいいのか」を説明できる言葉をつくる

・看護行為の意義を明示

>> 次の患者さんのケアに活用できる「知」に
>> 実践の意義・意味を可視化

訪問看護師が実践する家族介護者への代理意思決定支援 —胃瘻造設の決定を支援した訪問看護の事例—

安塚 則子¹⁾ 森元 陽子¹⁾ 和智 理恵¹⁾ 野口麻衣子²⁾ 山本 則子³⁾

要 旨

本論文は、胃瘻造設への家族の代理意思決定を支援した約3カ月間の看護実践に関する事例研究である。分析のため、主に担当した訪問看護師が実践内容を経過に沿って文章化した。その看護師と、その同僚、および研究者が共同で内容を検討し、実践の意図に沿ってカテゴリーを生成し、援助内容を整理した表を作成した。訪問看護利用者は80代男性でレビー小体型認知症があり、誤嚥性肺炎のため入院し、経鼻経管栄養を開始して退院した。主介護者は妻80代で腰痛・膝関節症があり、娘は50代で常勤勤務だった。退院後も誤嚥性肺炎を発症して主治医から胃瘻の造設を勧められ、家族は悩んだ末造設を決定した。訪問看護は退院時に開始され初期以外ほぼ週4回訪問した。代理意思決定支援のための看護内容は4カテゴリーにまとめられ、ほぼこの順序で提供された。①介護負担の軽減のため排便処置や各種予防的処置をした。②情報過多の苦痛緩和のため、看護師からは新たに情報提供しなかった。③代理意思決定の重責を緩和するため、どのような意思決定でも支えることを伝えるなどした。④決定内容を後悔しないよう胃瘻造設後には最大限の摂食の支援をした。支援により家族は自力で決定し、決断の苦悩はあったもののその後の経過の中で納得できていったようだった。訪問看護師による本事例の意思決定支援は、排泄や食事の支援など日常生活の援助が意思決定支援の目的で多様に組み込まれる点が特徴的だった。

キーワード：代理意思決定、事例研究、胃ろう、家族介護者、訪問看護

他の質的研究方法との関連

グラウンデッド・セオリー法から (Corbin & Strauss, Charmaz)

• 輸入した点:

- ①看護実践について「概念化」する技法(constant questioning)を活用している。
キャッチコピー、大見出し、小見出し、等の説明で敷居を下げる。
- ②実践の時間的経過に沿った検討も、GTAの理論化との類似性が感じられる

• 異なる点:

- ①看護実践の当事者である看護師が自分の経験を分析している点：複数の現象からの抽象化による概念化・理論化ではない
- ③constant comparisonによる、複数の現象での追認はできない（理論的比較は可能）
>>参加者間の「対話」の繰り返しによる適切性credibilityの確保
- ④固定されたデータがない（ワークシートへの記載は最初のとりにかき、対話を通じて追記されていくもの）

現象学的アプローチから

・ 輸入した点・類似点

- ① 自らの経験していることを、少し離れてありのままに捉えようとする技法は、フッサールの主張との類似性が感じられる
- ② 人間が「時間性」「文脈性」の中で存在していると理解しようとする点や、「気づき（ケアする）」によって行動が開始し・左右されるという理解は、看護実践において共通理解となっており、事例研究でも頻繁に表れる。これはハイデッガーに基づくベナーの現象学的人間論の主張と重なる。
- ③ 「五感で看護する」など身体的経験としての看護実践も、事例研究で頻繁に表れ、これはメルロ＝ポンティの身体論に重なる。
- ④ 看護実践の出発点としてのケアリングの意識（「積極的関心と善意」（Noddings、阿保）も、事例に常に現れる

・ 異なる点

- ① 経験を受け身に捉え、その成り立ちを解釈・記述することを目的としているわけではない
- ② 実践を意図的に能動的に組み立てる手がかりを得るための、過去の実践の振り返りと解釈記述の方法（15分で読める事例研究）

当事者研究から

• 輸入した点・類似点

- ①自分の経験を自分が語る（自分語り）というスタンス；フッサール哲学にも通じるが、通常のパラダイムのアプローチには見られないやり方。ただし…。：当事者研究では基本である。
- ②自分の経験だが、複数の人と共有することで、少し離れて眺めることができる（熊谷ら2013, 綾屋・熊谷2010）。当事者研究では基本。
- ③グループで熱心に問われ、語る。対話（問われ語り）により意識化・言語化が促進される。
- ④グループでの共有から共通理解に到達することによる、看護実践に関する間主観性「現象学的共同体」（石原2013）の構築と共有
- ⑤研究による癒し・回復：自分の体験に振り回されずに済むことが、人を強くするのか。。。??

• 異なる点

- ①実践に関する知の共有と蓄積を目指している

ダイアログが浮かび上がらせる

実践の意味

～「ダイアログ」による看護実践の知の生成～

- 自由で（対等で守られた状況）多様な文脈を持つ他者・過去の自己との対話の繰り返し：実践知の生成過程として重要な一部分
- 「当事者研究は、当事者が自らの体験について、一歩引いた視点からとらえ直し、言葉へともたらし、他者との体験のすり合わせを行い、新たに意味づけていくという作業」石原（2013）
- 対話によって、事例提供者の自分の経験に関する理解が更新されるとともに、対話メンバーの経験の意味も更新され、組みなおされていく。このようにして、グループ内に実践に関する共通理解が生まれる。
- 対話は、個別の話だけではなく一般化された共通理解につながる。
＝「側面的普遍」西村(2016)

看護実践と研究実践の不思議な相似

- 事例提供者と対話のメンバーや読者との間に生まれる共通理解は、ちょうど、看護師が患者とのやりとりの中で共通理解（共感）を生み出すことの重要性とも呼応するように見える。
- 看護実践が身体の側面を伴うこと（身体性）すらも、グループの語り合い（ダイアログ）で、対話の相手が身を乗り出し生き生きとした瞳で関心を持って聞くこと、夢中になって身振り手振りしながら語りすること（ナラティブ）に通じている。
- この相似が、このような研究方法による看護実践の知の創造の必然性を物語っているように見える

その他の試みとの比較

- 看護現場学（陣田, 2015）

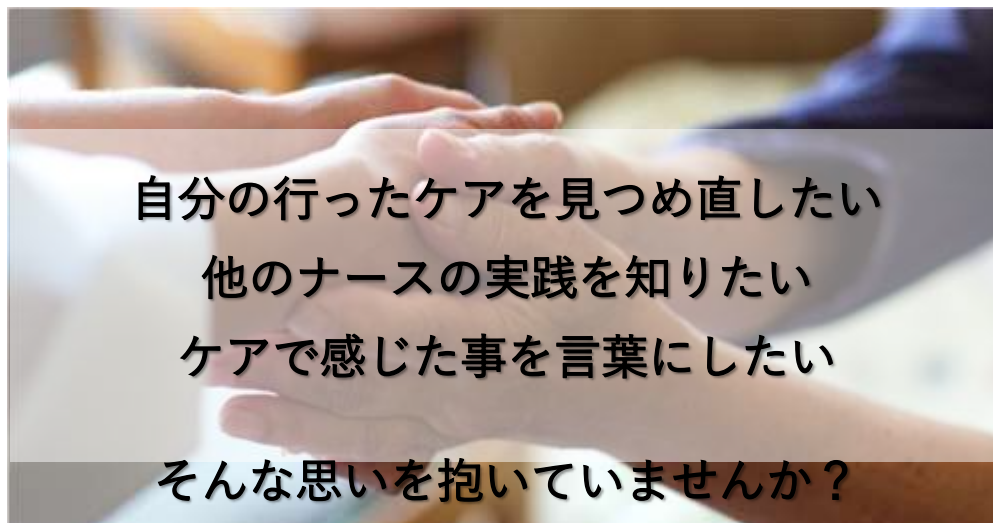
- どちらも看護実践の**体験**に注目・実践体験の振り返りによる**明日への活力の獲得**に注目
- 縦軸と横軸：「**事例**」を中心にした看護師の経験の振り返りと解釈（ケアの意味をみつめる事例研究）・「**看護師**」を中心にした経験の振り返りと解釈（看護現場学）
- 看護師の**成長のものがたり**に注目（看護現場学）
- 看護実践の**知の共有と蓄積**に注目（ケアの意味をみつめる事例研究）

- 看護リフレクション（東, 2009）

「看護師が状況に沿った**意図的な実践**を行うために、一定の方法を用いて自己の看護実践を振り返り、実践に潜む**価値や意味**を見出し、それを次の実践に活かすことによって、さらに状況に沿った**意図的な実践**を行うためのプロセス(p.29)」

ケアの意味をみつめる 事例研究セミナー

主催：東京大学大学院 高齢者在宅長期ケア看護学分野



事例研究の基本から始まり、学会発表・論文執筆を行えるようになる事を目指した4回シリーズのセミナーです

講師：山本 則子 高齢者在宅長期ケア看護学分野 教授

【日程】

第1回 実践にキャッチコピーをつけよう！

11月3日(金/祝) 9:30～11:30

*午 終了 2時 事例研究発表会

第2回 実践内礼を伝えて伝えよう！

倫理審査ってなんだろう？

12月9日(土) 13:00～17:30

第3回 学会で発表するポスターを作ろう！

1月27日(土) 13:00～17:30

第4回 実践を論文にして広めよう！

2月17日(土) 13:00～17:30

【参加費】 各回 1000円

【場所】 東京大学 本郷キャンパス

第1回：医学部図書館 3階 333号室

第2回目以降：医学部5号館 2階201号室

参加申し込み方法



下記のQRコードから申し込みフォームで登録をお願い致します。

<締め切り>

各セミナー開催日の前日9時

引用・参考文献

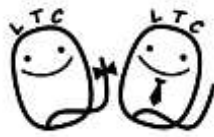
- Corbin J, Strauss A. (2014). Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory (4th ed). Sage.
- Charmaz K. (2014). Constructing Grounded Theory (Introducing Qualitative Methods series) (2nd ed). Sage.
- Benner P, Wrubel J. (1999). 現象学的人間論と看護 難波卓志 (訳) 医学書院.
- 阿保順子. (2015). 身体へのまなざしーほんとうの看護学のために. すぴか書房.
- Noddings N. (1997). ケアリングー倫理と道德の教育：女性の観点から 立山善康、林泰成、清水重樹、宮崎宏志、新茂之 (訳) 晃洋書房
- 石原孝二. (2013). 精神病理学から当事者研究へー現象学的実践としての当事者研究と＜現象学的共同体＞ 石原孝二、稲原美苗編 共生のための障害の哲学ー身体・語り・協働性を巡って UTCP Uehiro Booklet, 2, 115-137.
- 綾屋紗月、熊谷晋一郎. (2010). つながりの作法 同じでもなく 違うでもなく (生活人新書). NHK出版.
- 熊谷晋一郎、大澤真幸、上野千鶴子、鷲田清一、信田さよ子. (2013). 一人で苦しまないための「痛みの哲学」. 青土社.
- 陣田泰子. (2015). 陣田塾 看護の“知の見える化”で現場が変わる!: より良い看護実践のための概念化スキル教えます! メディカ出版.
- 東めぐみ. (2009). 看護リフレクション入門ー経験から学び新たな看護を創造する. ライフサポート社.
- Merleau-Ponty, M. (2011). 知覚の哲学：ラジオ講演1948年. 菅野盾樹 (訳) ちくま学芸文庫.
- 竹田青嗣. (1989). 現象学入門. NHK出版.
- 西村ユミ. (2016). 看護実践の語りー言葉にならない営みを言葉にするー 新曜社.

これまでに掲載された事例研究論文

- 安塚則子、森元陽子、和智理恵、野口麻衣子、山本則子. (2015). 訪問看護師が実践する家族介護者への代理意思決定支援一胃瘻造設の決定を支援した訪問看護の事例一家族看護学研究, 20(2), 68-78.
- 岩戸さゆき、池田真理、吉田滋子、吉岡大晶、山本則子. (2017). 医療的ケアが必要になった重症心身障害児の在宅復帰を可能にした看護一母の本当の願いを引き出し実現した事例から一家族看護学研究, 23(1), 52-63.
- 大竹泰子、野口麻衣子、野原良江、山本則子. (2017). 最期の療養場所に関する意向の相違を抱えた家族に対する訪問看護師による意思決定支援 家族看護学研究, 23(1), 64-74.

「ケアの意味を見つめる事例研究」に関するその他の論文等

- 山本則子. (2015). 看護実践の知と質的研究 質的心理学フォーラム, 7, 74-82.
- 山本則子、吉田滋子、山花令子、齋藤凡、柄澤清美、榊原哲也. (2017). 看護実践に資する知はどのような事例研究で生成できるか、事例研究の知はどのように活用できるか. 看護研究, 50(5), 439-446.
- 齋藤凡、山本則子. (2017). 看護の見える化への事例研究の貢献. コミュニティケア, 19(10), 32-34.
- 池田真理、山本則子. (2017). 事例研究：看護実践を書き出してキャッチコピーをつくる. コミュニティケア, 19(11), 35-37.
- 山花令子、村山陵子、山本則子. (2017). 事例研究：ワークシートを用いた看護実践の言語化・概念化. コミュニティケア, 19(12), 35-38.
- 野口麻衣子、山本則子. (2017). 事例研究：学会発表をしよう！ コミュニティケア, 19(14), 31-35.
- 吉田滋子、山本則子. (2018). 事例研究：論文を書こう！ コミュニティケア (印刷中)
- 齋藤弓子、野口麻衣子、山本則子. (2018). 事例研究：事例検討会の紹介. コミュニティケア (印刷中)



関心をお持ちくださった方に・・・

東京大学大学院医学系研究科高齢者在宅長期ケア看護学分野のHPをご参照ください

<http://www.adng.m.u-tokyo.ac.jp/>

<http://tokyocasestudy.tumblr.com//>



本日はご参加いただき、ありがとうございました。